京都新聞 1994年(平成6年)1月16日 日曜日

料理のカラクリ アアそうなのか

◇1◇

吉田 清彦

家事のできない男は短命

一人前の〝主夫〟へ ノウハウをご紹介

バブルが崩壊して父親が家庭に戻ってきたとかで、家の中での男の姿が何かと話題になる今日このごろです。

そういえば、十年ほど前から、男女の性別役割を問い直すという視点でテレビCMウォッチングを楽しんでいるのだが、ここ数年、テレビCMの中で男の料理シーンの描かれ方に明らかな変化が現れている。それまでは、男の料理は「趣味として」描かれることが多かったのが、このところ、後片付けも含めて「家事として」の料理をさりげなくこなす男たちが、随分多く登場するようになってきている。

それだけでなく、二年ほど前のコンテストでは、男の料理シーンが描かれたシステムキッチンのCMが「好感コマーシャル」の上位に顔をそろえたことがあり、「いまやシステムキッチンは花ムコ道具になったのでは」とうわさしあったものである。

七～八年前までは、男が台所でゴソゴソすると「ゴキブリ亭主」と言われて嫌がられ、「亭主元気で留守がいい」などというCMが話題になったりしたことを考えると、まさに隔世の感がある。

もちろん、このような変化は、バブルの崩壊というような一時的な要因だけによってもたらされたのではなく、一九八六年の男女雇用機会均等法施行以後の「女も働く時代」を如実に反映したものでもある。

さらに言えば、六十歳代で妻に死に別れた夫で生活的自立のできていない人（食事作りや身の回りのことができない人）は、平均三年の寿命しかない（逆に、六十歳代で夫に死に別れた妻の平均寿命は十五年間）というショッキングな調査結果もある。

人生八十年時代を迎えて、好むと好まざるにかかわらず、「趣味として」のではなく、「家事として」の男の料理の能力が必要な時代がすでに訪れているのである。

これから数十回にわたる連載のなかで、あくまでも「家事としての料理」にこだわりながら、料理に対する基礎知識が全くない人でも、最終的になんとか一人前の〝主夫〟になれるためのノウハウを、大胆に、そして楽しく紹介していきたいと思う。

（家事としての男の手料理主宰）

よしだ・きよひこさん 一九四四年兵庫県生まれ。フリーライター。神戸市立外国語大学卒業後、調理師、喫茶学校講師、飲食関係ライターを経て現在、CMチェックの市民運動や関西育時連、男女共修家庭科をすすめるWEの会などに精力的にかかわる。昨年京都新聞に「年収150万円で暮らす法」を連載。神戸市在住。